

V 今月の注目情報:高温乾燥の影響を受けた米国の穀物需給

2021/22年度の米国の春小麦、とうもろこし、大豆の作付け・生育は、4月後半以降温暖な天候に恵まれ進展し、7月には春小麦は出穂期、とうもろこしは受粉期、大豆は開花期を迎えたとみられる。しかし、6月末には北西部で記録的な高温、乾燥を記録し、7月に入り一部で降雨が見られたものの、西部を中心に乾燥した状態が継続している。一方、中国向けの輸出増加に加え、米国経済の回復によるバイオ燃料向け需要等の伸びもあり、期末在庫は低水準となっている。最近の米国の状況をまとめた。

1 米国の2021/22年度の作付け・生育動向

(1) 作付面積調査

6月30日に公表された米国農務省(USDA)の作付面積調査によれば、作付面積は、小麦は前年度より5%増の1,892万ヘクタール、大豆も同5%増の3,543万ヘクタール、とうもろこしは同2%増の3,751万ヘクタールとなった。

小麦は前年度より増加も1919年の調査開始以来4番目に少ない水準である。小麦全体の7割を占める冬小麦は7%増も、春小麦は一部地域で同時期に作付けされるととうもろこしや大豆と競合したとみられ、前年度よりデュラム小麦で12%減、デュラムを除く春小麦で5%減となった。

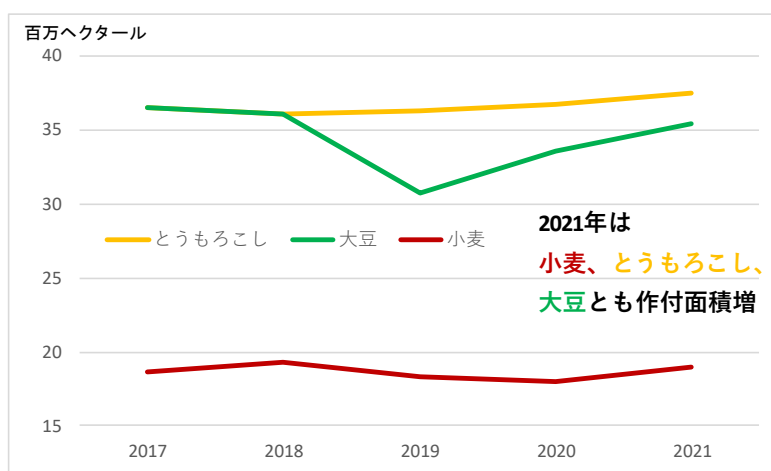
一方、とうもろこし、大豆は米国の作付時期の4月～5月にかけ中国の旺盛な輸入などで穀物価格が高騰し、農家の生産意欲を刺激したとみられ、作付面積は前年度より増加した。

なお、その他の作物では、綿花については、474万ヘクタールで対前年比3%減少し、コメは、108万ヘクタールで対前年比12%減少。背景には、カリフォルニア州の灌漑用水の不足やミシシッピ川沿いでの大豆など他の作物への作付けのシフトがあるとみられる。

(2) 6月下旬から7月の天候

6月中旬以降、米国北部からカナダにかけ高温乾燥となり、6月末には、北西部で平年より摂氏で6～11度高温となった。特にオレゴン州やワシントン州では地域によっては摂氏47度を記録し、過去最高に並びあるいは迫った。この熱波は乾燥を伴い、放牧地、牧

図1 米国の小麦、とうもろこし、大豆作付面積の推移



資料：米国農務省「Acreage」

写真 ノースダコタ州の春小麦（6月25日撮影）

この圃場では十分な降雨がなく春小麦が十分に生育しなかったため収穫を断念した



草地、成熟した冬小麦、春作物に悪影響を及ぼした。コーンベルト北部・西部も高温乾燥となった。一方、コーンベルト東部では6月に適度な降雨があり、生育は順調である。

7月に入り温度は低下したものの、コーンベルト西部は乾燥気味となっている。春小麦は出穂期が終盤となり、とうもろこしは受粉期、大豆は開花期を迎えている。USDAの「Crop Progress」(2021.7.19)によれば、特に高温、乾燥の影響があったとみられる春小麦の作柄評価は、「良～やや良」は11%(前年同期68%)と非常に低い。また、とうもろこしは、「良～やや良」は65%(同69%)、大豆は、「良～やや良」は60%(同69%)、と前年同期を下回っている。

(3) 生産見通し

7月のUSDAの生産見通しは、6月の作付面積調査を反映しており、とうもろこしは、6月の作付面積の増加を織り込み前月予測より440万トン上方修正され、3億8,520万トンと前年度より6.9%増の見通しである。大豆は6月予測の1億1,990万トンが据え置かれた。一方、小麦は、北西部の熱波と干ばつの影響により春小麦やデュラム小麦やその他春小麦の単収が引き下げられ、デュラム小麦は対前年度比46%減の100万トン、春小麦は、生産量は小麦全体で前月対比41%減の940万トンとなった。現在収穫中の冬小麦も含めた合計で、前月見通しより410万トン下方修正され、対前年度比4.4%減の4,750万トンの見通し。

2 米国の需要と輸出

(1) 回復する国内需要

小麦に関しては、春小麦の生産量の下方修正により、消費量も下方修正されたが、飼料用需要が増加していることもあり、合計で3,250万トンと前年度比6.8%増と見込まれている。

とうもろこしに関しては、2020/21年度以降、新型コロナウイルスの影響で落ち込んでいた米国内のバイオ燃料需要が、ワクチン接種の進展により、規制が緩和され、自動車の運転機会の増加により回復に転じた。USDAの7月見通しによれば、2021/22年度のとうもろこしのバイオ燃料向け需要は6月予測が据え置かれ1億3,210万トンで前年度より増加し、飼料用需要は供給量の増加により上方修正され1億4,540万トンで、前年度と同水準となる見込み。食用等を含む消費量計で3億1,350万トンと前年度比で1.2%増加すると見込まれている。

2021/22年度の大豆の搾油需要も国内のバイオディーゼル向け需要が堅調で、需要量は前年度より3.0%増の6,380万トンの見通しである。

(2) 伸びる中国向け輸出

5月26日付けのUSDAの四半期貿易予測によれば、米国の2021会計年度(2020年10月～2021年9月)の農産物輸出が、対前年度比21%増、280億ドル増で、過去の2014年度(1,523億ドル)を上回る史上最高の1,640億ドルの見込み。中国向けの大豆、とうもろこしの輸出が顕著で、主要因は農産物価格の高騰と、他の輸出国の減産や収穫遅れ等により輸出競争で優位となったことによるとしている。

米国の2021年1～6月の穀物等の輸出量(輸出検証高)をみると、小麦は1,255万トン、とうもろこし4,300万トン、大豆1,828万トンで、前年度よりわずかに減少の小麦を除いて増加している。特に、中国向け輸出が大きく増加しており、特に小麦は約3倍、大豆は約2倍で、とうもろこしについては約26倍となっている。

中国の海関統計を見ても米国産の輸入量及びシェアの増加が目立っている。

1～5月の輸入量で見ると、米国産の小麦については、前年同期比9倍の120万トン。とうもろこしについては、前年5000倍以上の667万トンとなっている。大豆も

同様に前年同期比2.4倍の2,153万トンで、収穫遅れで輸出が遅れたブラジル産を抑えて、現時点ではシェアが前年同期の23%から56%に増加している。但し、6月以降、ブラジルの収穫進展に伴い、米国産からブラジル産に置き換わるとみられる。

表1 小麦、とうもろこし、大豆の米国の対中輸出（上）と中国の対米輸入（下）

	2020年1-6月			2021年1-6月			前年対比
		うち中国	シェア		うち中国	シェア	
小麦	1,267	51	4.0	1,255	153	12.2	200.1
とうもろこし	2,571	47	1.8	4,300	1,242	28.9	2516.4
大豆	1,577	371	23.6	1,828	748	41.0	101.5

資料：米国農務省 輸出検証高

	2020年				2021年			
	1-5月	うち米国	年計	うち米国	1-5月	前年同期比	うち米国	前年同期比
小麦	231	13	815	178	459	99	120	808
とうもろこし	277	0	1,130	434	1,173	323	667	531991
大豆	3,388	897	10,033	2,589	3,823	13	2,153	140

資料：中国「海関統計」

3 国際需給、価格への影響

穀物等の国際価格については、前年後半からASFからの豚肉生産の回復による中国の穀物等の輸入増や南米の乾燥懸念等に伴い上昇し、5月前半には2012年の過去最高の価格に近づく水準まで上昇した。その後は、米国の作付け、生育の進展等に伴い、高水準ではあるが、5月の水準よりは下落している。

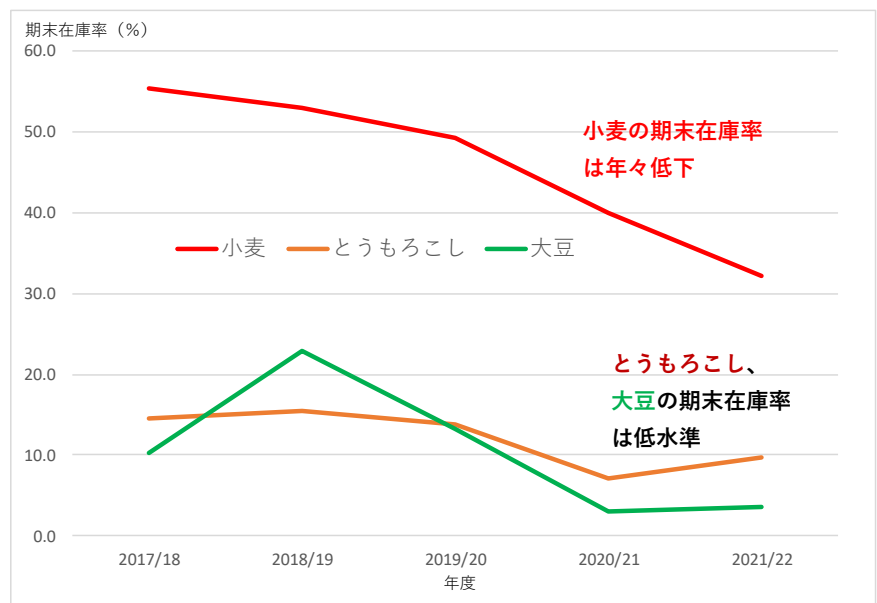
2021/22年度の米国の小麦、とうもろこし、大豆の国内需要は、それぞれ増加する一方、輸出については、期首

在庫を含めた供給量の制約から減少する見通しである。期末在庫率は、小麦は32.1%と年々減少しており、とうもろこしは9.6%、大豆は3.5%と2年連続で1桁台の低水準となる見通しである。

今後の国際需給への影響としては、7月以降の米国の受粉期、開花期の高温・乾燥の影響がどの程度生産量に影響するかは不確定な部分もある。特に、7月の気温や水分がとうもろこしの単収決定に大きな影響があるといわれている。

一方、中国の6月の大豆の輸入量が前年同月を下回る等、中国の穀物輸入のペースも緩やかになっており、米国の需給動向と国際需給、価格への影響については引き続き注視していく。

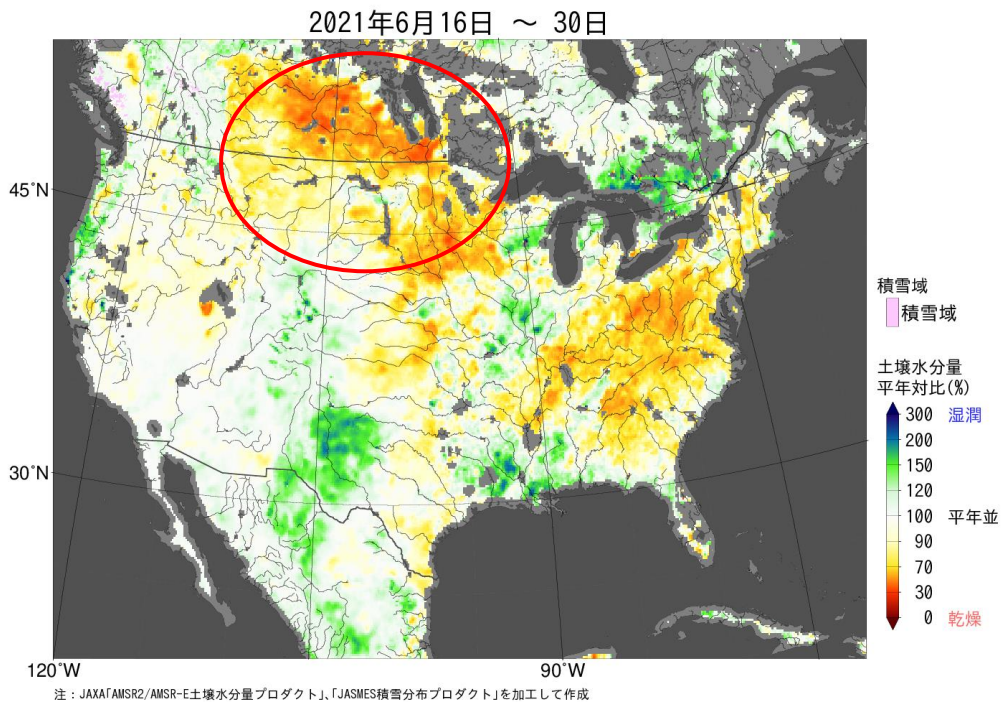
図2 米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(2021.7)

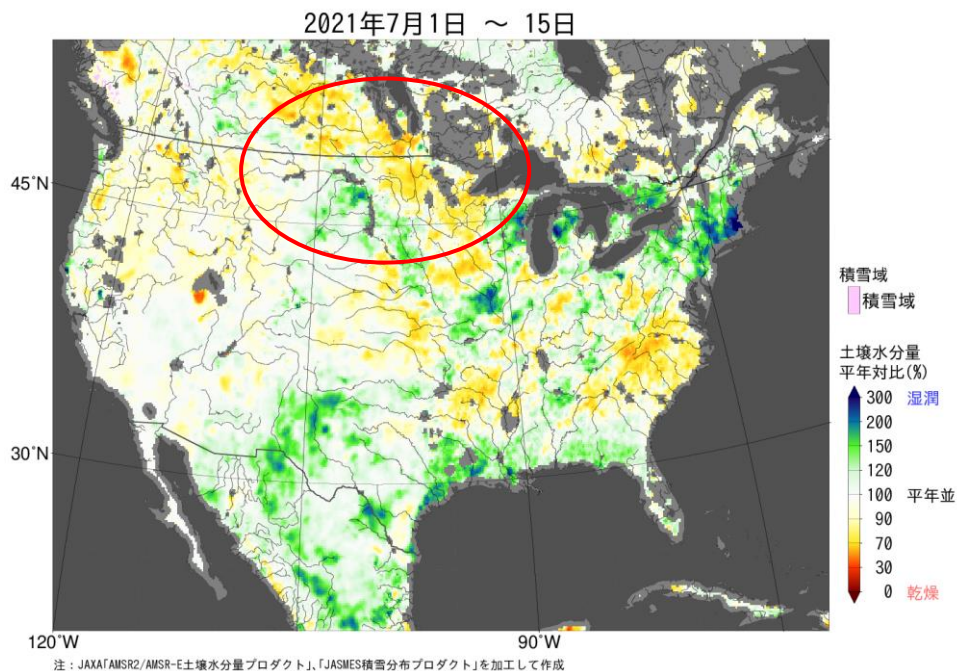
図3 図 JASMAI 北米の土壌水分量平年対比

(6月後半) コーンベルト北部からカナダ西部にかけ土壌水分が平年より少ない(赤丸)



(7月前半) コーンベルト北部からカナダ西部にかけ

土壌水分が少ない状況が継続も、6月後半より改善(赤丸)



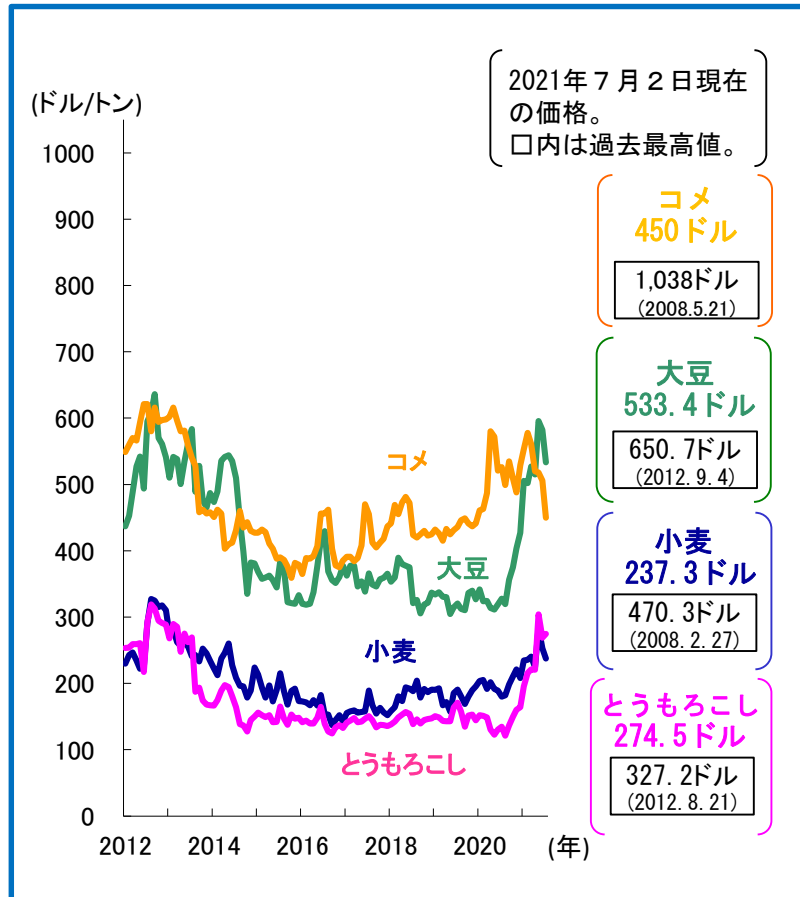
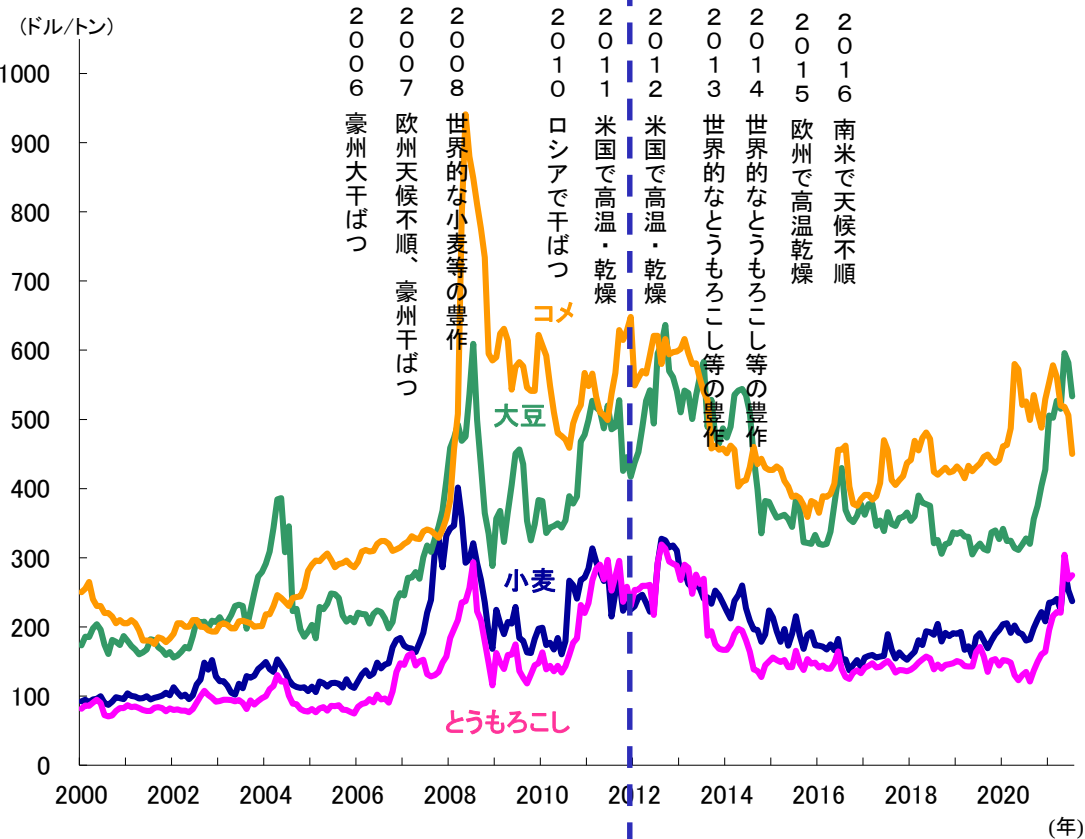
資料: 農林水産省「農業気象情報衛星モニタリングシステム」
<https://jasmai.maff.go.jp/>

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥懸念、中国の輸入需要の増加等により、大豆、とうもろこしを中心に上昇。コメは、2013年以降低下したが、2020年ベトナムの輸出枠の設定等により3月末から上昇。同年4月末の輸出枠の解除等で下落も、依然として高止まり。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



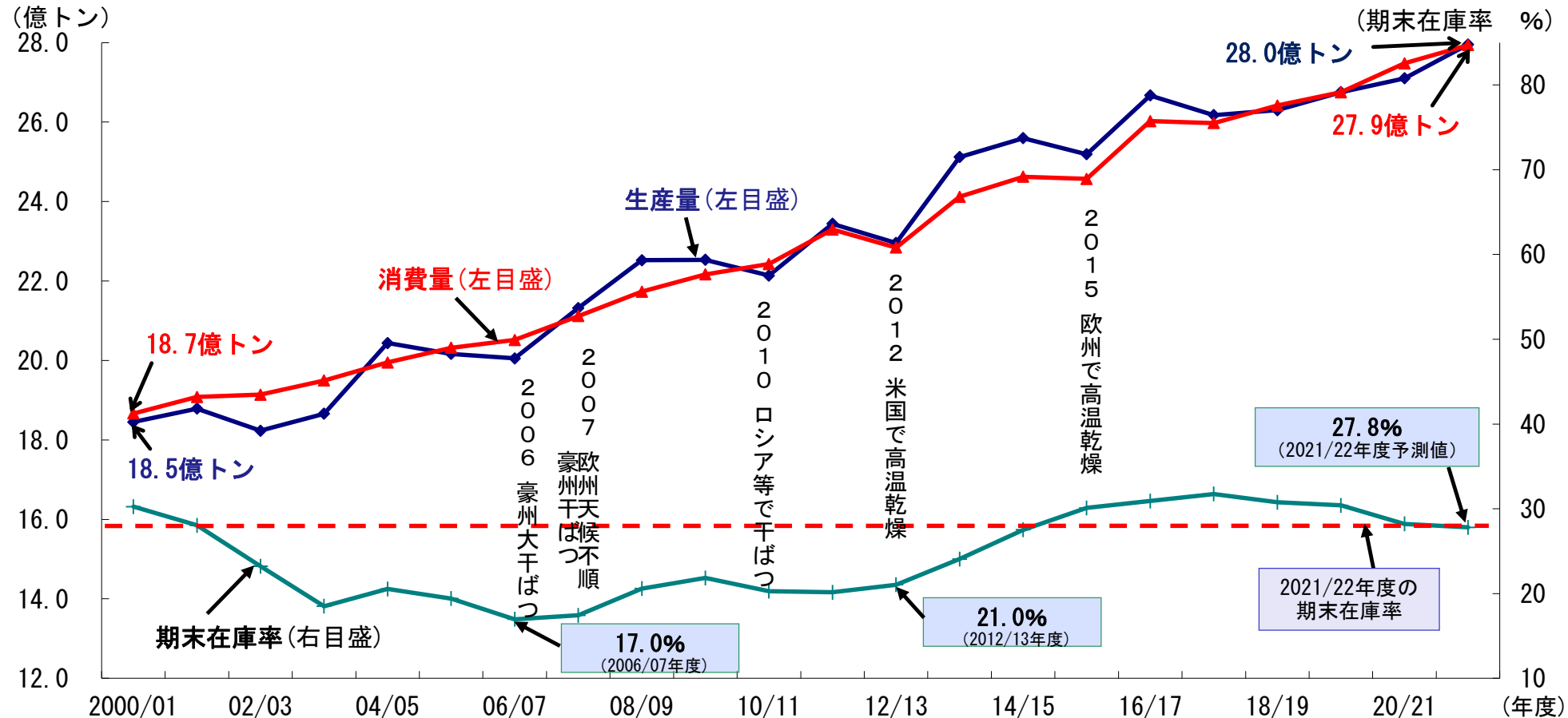
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
なお、コメの最新価格は2021年6月30日現在の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回るものの、前年度より低下し、27.8%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

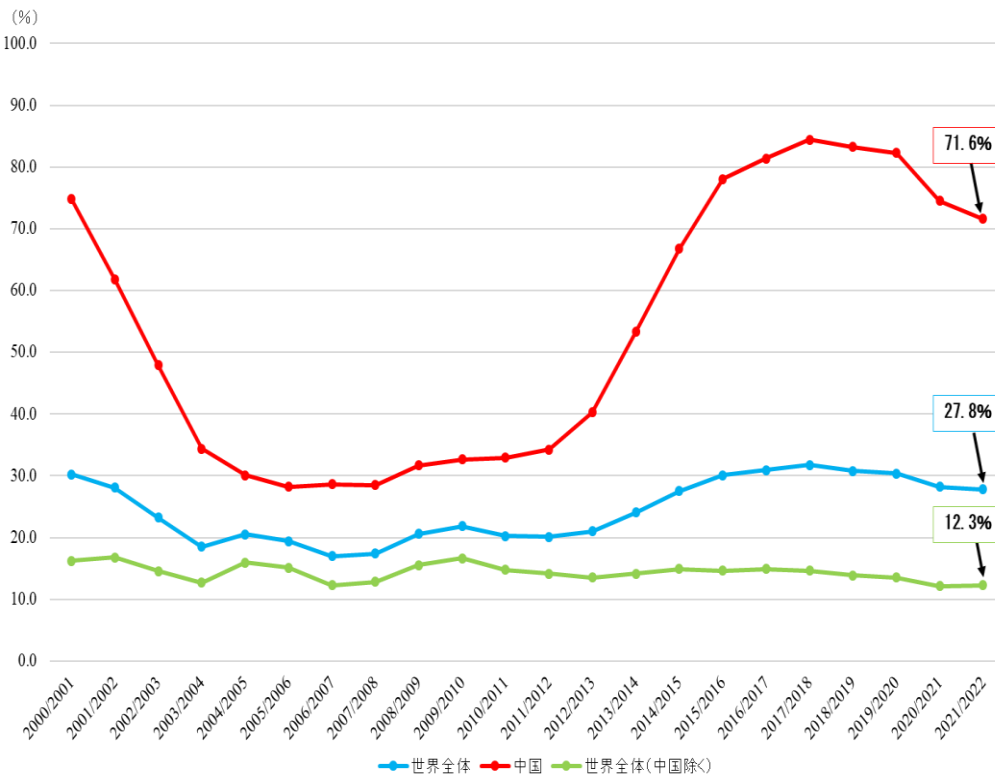


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(July 2021)、「PS&D」

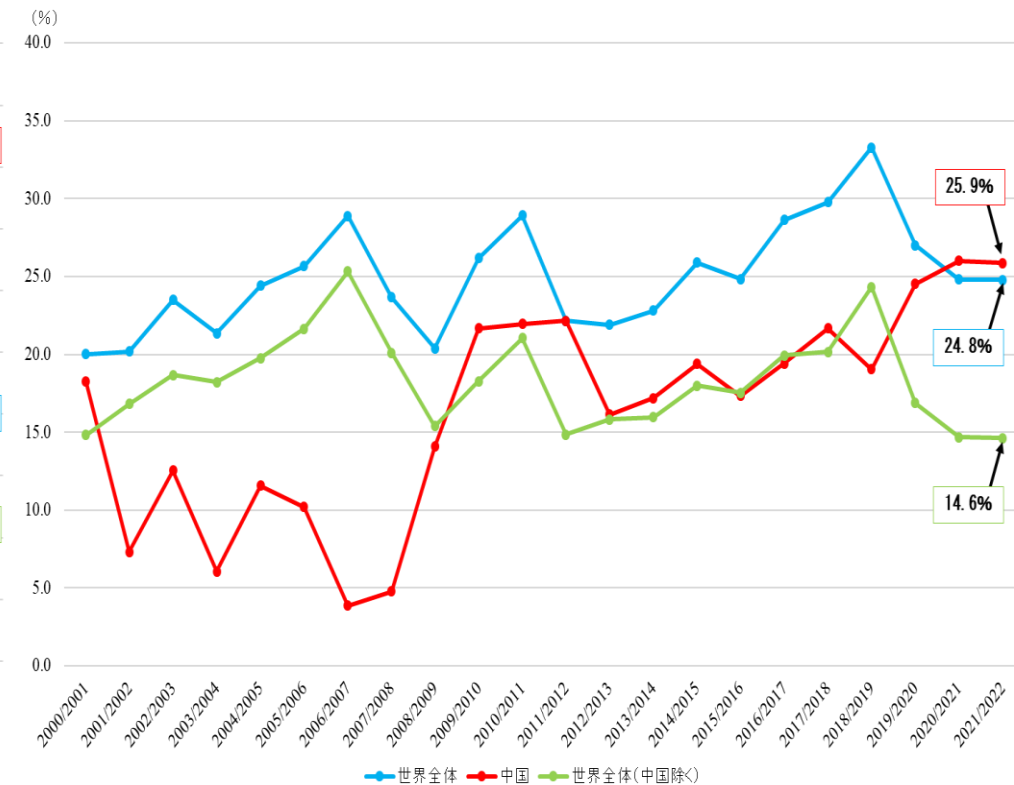
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(July 12, 2021)

注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。また、小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

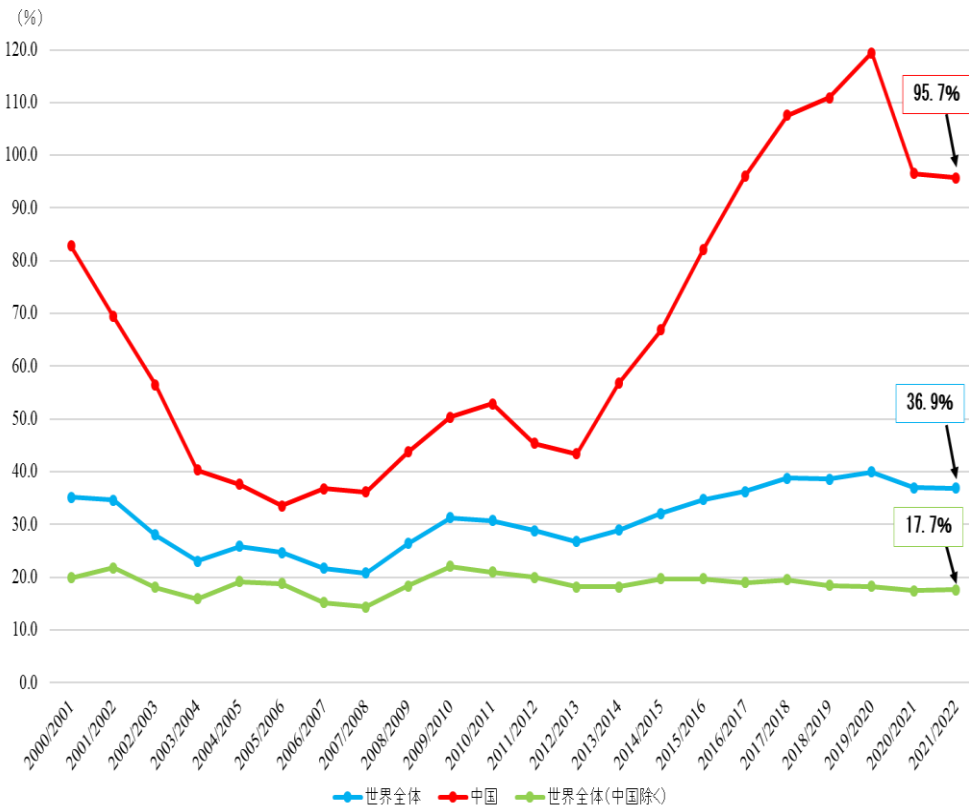
2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／(消費量＋輸出量－輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量)×100

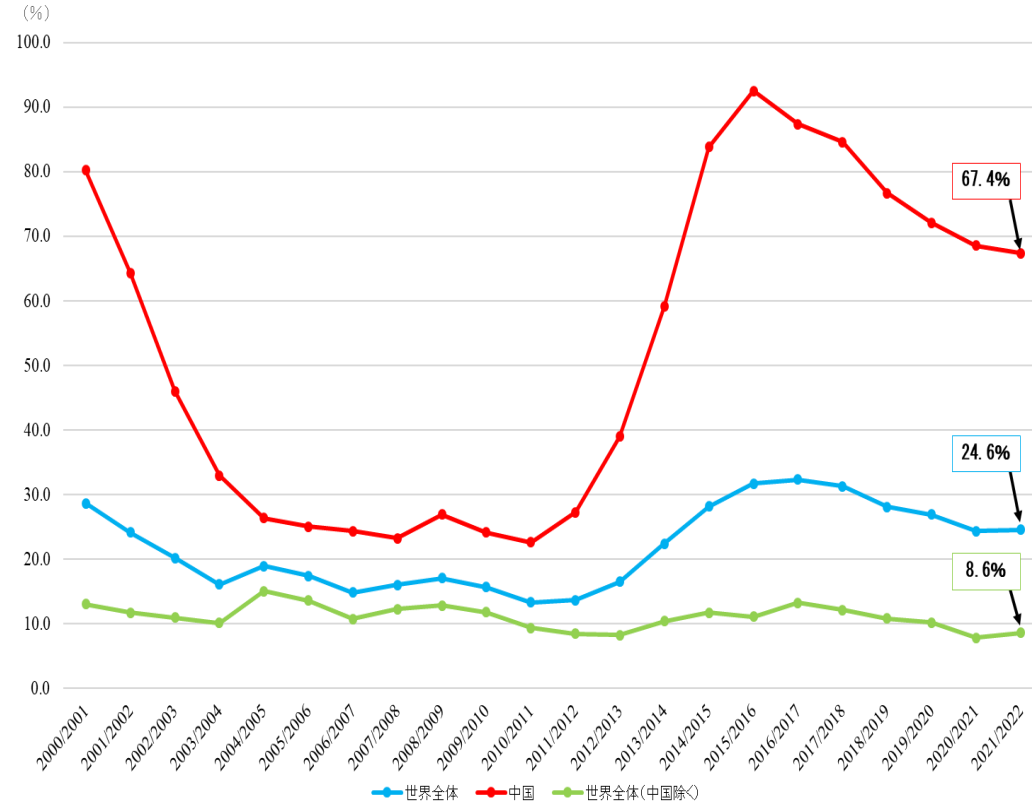
4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(July 12, 2021)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

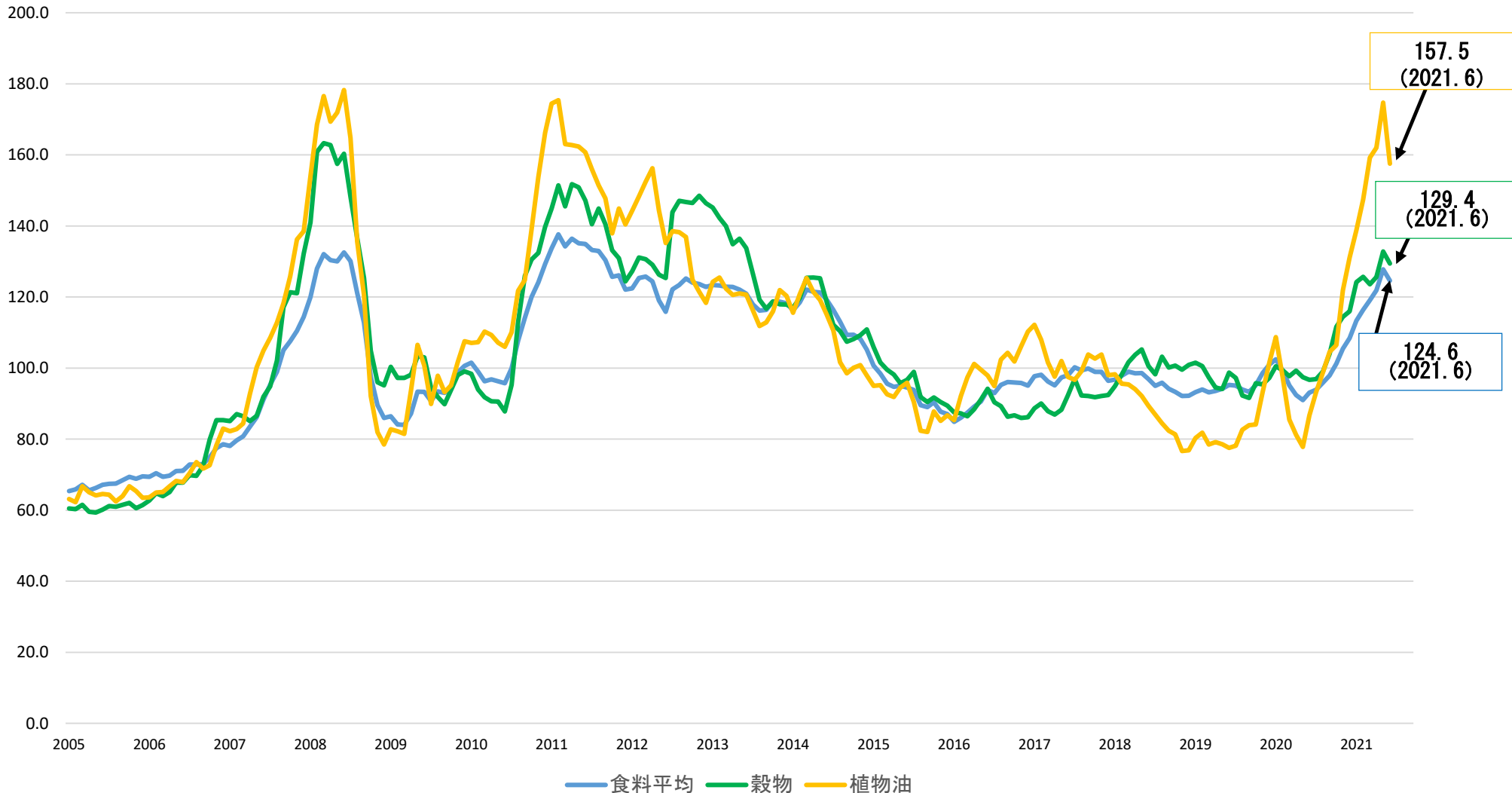
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4 FAO食料価格指数の推移

(2014-16平均=100)



資料：FAO「Food Price Index」(2021.07)より作成

注：穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

資料5 食品小売価格の動向

○ 国内の加工食品の小売価格については大きな値動きはなし。

消費者物価指数（総務省）
（令和3年1月～令和3年6月）

【参考】
食品価格動向調査（農林水産省）
（令和3年1月～令和3年7月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	101.1	100.9	101.4	102.3	101.2	100.4	100.2	99.9	100.5	99.5	100.3	-1.2%
即席めん	100.0	99.5	99.0	102.4	103.9	104.1	104.4	104.0	105.1	103.6	102.9	-1.5%
豆腐	100.0	100.5	100.7	101.0	101.9	102.4	102.7	103.0	102.9	103.0	102.9	1.1%
食用油 (キャノーラ油)	97.8	94.5	93.3	92.8	92.0	91.3	91.0	90.3	90.8	91.3	94.1	2.4%
みそ	99.4	99.1	99.6	101.4	102.3	101.2	102.0	102.5	102.1	102.3	100.8	-1.8%
チーズ	99.3	98.8	102.6	102.9	101.7	101.4	102.0	101.2	101.9	99.3	97.8	-3.4%
バター	101.5	101.7	102.0	102.3	102.4	102.3	102.4	102.2	102.3	102.3	102.4	0.3%
マヨネーズ	98.1	96.7	95.3	95.1	94.5	93.8	94.6	94.8	94.1	94.9	94.4	-0.5%
生鮮食品を 除く総合	99.7	100.2	101.0	101.7	101.5	101.4	101.5	101.8	101.5	101.7	101.7	0.2%

注1：平成27年の平均値を100とした指数で表記。

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.9	99.5	99.8	103.2	101.9	101.2	101.6	101.6	100.5	99.9	100.3	99.7	-0.7%	-1.9%
即席めん	99.8	99.6	99.5	105.3	107.6	106.5	107.2	107.2	107.2	107.2	107.2	106.5	-0.6%	-1.3%
豆腐	96.9	95.6	95.0	95.7	94.8	94.7	96.3	93.9	93.4	94.3	95.1	95.1	0.0%	0.8%
食用油 (キャノーラ油)	96.3	94.6	94.6	100.1	96.7	95.0	94.0	93.7	95.6	95.0	96.8	97.4	0.6%	1.3%
みそ	99.8	101.6	106.8	111.0	110.5	109.4	111.0	109.9	108.7	109.9	110.3	108.5	-1.7%	-1.5%
チーズ	100.0	99.7	103.2	105.7	104.8	104.8	105.8	104.8	103.8	103.2	97.5	104.3	6.9%	-0.5%
バター	101.3	102.0	102.3	102.7	103.3	103.4	103.2	103.4	103.0	102.7	103.0	102.7	-0.2%	-0.5%
マヨネーズ	99.2	98.4	97.2	102.4	99.3	98.3	98.3	98.0	96.9	96.9	98.3	103.8	5.6%	5.6%

注1：平成27年の平均値を100とした指数で表記。

注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3：調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4：令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～7月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。